

2014年10月12日・13日の2日間にわたり第47回日本薬剤師会学術大会が行われました。弊社においては本年度口頭発表1題、ポスター発表2題の発表を行いました。演題名については下記の通りです。

「バレニクリン酒石酸塩錠の調剤例について」

「後発医薬品に一旦変更したが患者の希望で先発医薬品に戻した症例について」

「新バーコードを利用した調剤支援システムの構築-「けやきくん」Ver.1.97」

「バレニクリン酒石酸塩錠の調剤例について」

発表にあたって当薬局で薬歴をもとに患者への確認を行い治療継続状況、禁煙成功率、副作用発現状況の調査を行った。薬局としてより多くの患者が禁煙治療を継続成功させるために、薬剤師が注意すべき点について知り、効果的な指導助言を行うことを目的とした。2008年5月から2013年9月に当薬局へバレニクリン酒石酸塩錠の処方箋の持ち込みのあった患者323名について調査を行い、治療後も来局があった聞き取り可能な患者71名に関して禁煙継続状況について確認を行った。全体における禁煙成功患者は36.5%でその内、かかりつけ医の医療機関で禁煙治療を受けた患者の禁煙成功率は65.2%と高い数値を示していることが分かった。治療中に副作用を訴えた患者は51.4%で主な症状は胃腸障害、精神障害の順に高いことが分かった。またそのうち副作用で治療を中止した患者は9名であった。禁煙継続状況調査では71名中33名が喫煙を再開していた。調査をもとに医師との良好な信頼関係のもとでの治療の実施、多くの人に禁煙を見守られる環境が禁煙成功率の高さにつながっていると考えられた。薬局としても患者の信頼を得て禁煙治療に携わることのできるような関係を築くことが大切であり、特に発現頻度の高い副作用について患者に不安を抱かせないような説明で服薬指導を行い禁煙治療のフォローを引き続き行っていきたい。

「後発医薬品に一旦変更したが患者の希望で先発医薬品に戻した症例について」

後発医薬品の使用促進において弊社も積極的に後発医薬品の変更調剤を勧めてきたが薬の変更調剤後に先発医薬品に戻した例が散見された。今後の後発医薬品の紹介や投薬時の説明の参考にするため、後発医薬品を継続したくない理由の分析、検討を行った。

平成26年1月1日から平成26年5月10日の間における該当患者14名における薬歴の調査を行った。変更理由のうち後発医薬品の使用感の悪さを挙げた例が7例、血圧調整時における後発医薬品の変更による血圧の不安定要因を挙げた例が2例、後発医薬品の使用とは無関係と思われる体調不良に関する例が2例、後発医薬品に対する先入観・不信感と思われる例が2例、有害事象が1例であった。

使用感によるものに関しては製品設計、製剤とする時の工夫で解決が見込まれ、味などの理由で飲みにくい製品はあらかじめ他の製品を選定する必要があると考えられた。有害事象を変更理由に挙げた例を除いた6例については血圧などのために薬剤を調整中のもの、

変更時に体調不良が重なってしまったもの、漠然とした不安などによる後発医薬品に対する先入観、不信感であり、薬剤そのものの品質を問うものではないと考えられた。

結論として後発医薬品への変更を行う際は薬剤調整中や体調の安定していない患者に対しての変更実施は避けたほうが無難であると考えられる。また単に薬の価格だけを求めるのではなく、薬剤の品質、使用者の目線に立った後発医薬品の選定を行うことで薬局としての重要な役割を果たしていきたいと考えます。

「新バーコードを利用した調剤支援システムの構築-「けやきくん」 Ver.1.97」

調剤システム「けやきくん」を開発して13年が経過したがこの度、厚生労働省による平成24年6月29日付の通知「医療用医薬品へのバーコード表示の実施要項」の一部の改正についてにより平成27年7月以降は医療用医薬品の内服薬、外用薬においても調剤包装単位の商品コード表示「GS1 データバー」が必須とされた。従来使用してきた JAN コードが廃止され随時 GS1 データバーに切り替わるため「けやきくん」 Ver.1.97 において GS1 データバーの読み取り機能を搭載し、各店舗のバーコードリーダーを GS1 データバー読み取り対応機種に変更することで改正への対応を行った。

これまで医療用医薬品へのバーコードを利用して秤量監査、発注・検品機能、在庫管理、棚卸機能、見積もり機能といったシステムを構築してきた。

今回の発表においては後発医薬品の使用促進により各店舗における薬の備蓄在庫が膨らんできていることを踏まえ、弊社での在庫管理における不動在庫処理機能についての紹介も行った。今後も錠剤監査の実施など GS1 データバーを活用した新たな取り組みの可能性を探りつつ改善のための努力を続けていきたい。

今後も薬剤師会学術大会等で積極的に発表活動を行い私たちの取り組みを皆様に知っていただくとともに、私たち従業員もそこから薬局業務を見つめなおすことで業務改善を行いより有意義な活動につなげていきたいと思えます。